

① 敬語表現の使われ方

卓 星 淑

— はじめに —

日本語における敬語表現は、尊敬語、謙譲語、丁寧語、美化語の四つの分類方法が一般的であるが、美化語の記述は名詞レベルにゆだね、ここでは、尊敬表現と謙譲表現、そして丁寧表現に分けて考えたい。

今回の共同研究の資料をゲストとインタビュアーの敬語の使い方を中心に表現別に整理したのが〈表1〉である。分析は、次のような点にもとづいておこなった。

- ① インタビュアーの質問に対する答えの部分の一つの単位ととらえ、それぞれ番号を付け、その総数を談話総数の項目とした。一つの談話はいくつかの文レベルのものを含んでいるものが多いので、談話数＝文数ではない。インタビュアーの談話数も同じ方法で数えた。
- ② 整理の順序は年齢順で、年齢の低い方からケース1、2と並んでいる。
- ③ 尊敬表現は、一般的に尊敬語ととらえられている表現である。
- ④ 謙譲表現は、一般に謙譲語としてとらえられている表現である。
- ⑤ 丁寧表現は、「です、ます、ございます、おります」の類の表現である。丁寧表現は単独として使用される場合（「行きます」「そういうことです」など）と、尊敬表現、謙譲表現と並列し出現するケースがあり（「いらっしゃいます」「お願いいたします」など）、丁寧表現の数の中には、尊敬表現・謙譲表現の数と重なるものもある。

〈表1〉によると、まず、ゲストの方は、全ゲストの用いた表現を合計してみると、尊敬表現が78回と、謙譲表現が62回で、ゲストのケース1・5・9・10・12・13・15では1度も尊敬表現が使われていない。また、ケース8・16・22では1度も謙譲表現が使われていないなど尊敬、謙譲表現の少なさが目立つ。これは、このインタビュー自体の性格として話題がゲスト自身のことが中心になっていることから、まず、尊敬表現が多くないということだろうと予測できる。一方で、話題が自分自身のものが多ければ謙譲表現が用いられることも多くなる

<表1>

	ゲ ス ト				インタビューー		
	談話 総数	尊敬 表現	謙譲 表現	丁寧 表現	談話 総数	尊敬 表現	謙譲 表現
ケース 1	68	0	3	110	72	20	10
2	37	1	5	92	39	10	13
3	65	6	8	118	67	22	8
4	63	1	1	105	65	9	14
5	51	0	2	55	52	17	8
6	64	2	1	117	64	13	1
7	60	3	1	64	63	17	3
8	36	4	0	95	38	13	3
9	53	0	2	135	55	16	10
10	34	0	1	65	39	20	14
11	50	1	6	123	52	12	6
12	46	0	1	88	48	23	17
13	61	0	2	95	64	20	8
14	37	1	4	82	42	11	8
15	56	0	2	120	56	11	12
16	40	2	0	54	42	13	5
17	41	14	6	110	44	10	15
18	40	9	4	137	41	13	4
19	34	2	6	94	34	14	6
20	51	12	4	108	51	18	5
21	35	14	3	92	35	28	6
22	56	6	0	146	56	23	6
計	1,078	78	62		1,119	353	182

うことが予想されたのだが、その謙譲表現もそれほど出現しない。これは何を意味しているのか。尊敬表現と謙譲表現といういわゆる敬語表現をそれほど好まない人ばかりがゲストに選ばれたのだろうか。

インタビュアーはその立場上当然かもしれないが、尊敬表現と丁寧表現とをふんだんに駆使してゲストに質問している。それに対応するゲストたちが、あまり尊敬、謙譲表現を用いていないということなのである。非丁寧な表現もしばしば現われる。量的にみてインタビュアーの方では、尊敬表現が353回、謙譲表現が182回用いられている。談話総数はインタビュアーの方がゲストのそれに比べやや多いが、談話一つの中の文レベル（文数）になるとゲストの方が断然多い。この点を念頭に入れ、ゲストとインタビュアーの尊敬表現と謙譲表現とをみると、インタビュアーの方が、4.5倍、2.9倍の多さで使用している。これは、インタビュアーという立場上、ゲストを迎える側としてことばづかいがより丁寧であるということの表われとみられる。しかし、インタビュアーである男性がゲストである自分に尊敬表現を用いながら話しかけるにもかかわらず、そのゲストの応対は、敬語表現抜き（特に、謙譲表現の面で）であることが多いという事実は、一般に女性は敬語をよく使うという通説に反するものと思われる。この事実から、現代日本の女性の敬語に対する意識の変化の一局面が窺えるのではないと思われる。渡辺友左氏が、「現代社会の日本人は、相互尊敬（尊重）という標識によっていいねいな敬語形式を使うようになったし、〈疎〉の社会結合という標準によっても相互にいいねいな敬語形式を使うようになったのである」（注1）と述べていることと関連して考えると、自分を下げることによって相手のことを敬うという意識はうすれているという事実の現われのように思われる。

〈表1〉をもとに、まず「尊敬表現」から考えてみたい。

1. 尊敬表現

〈表2〉は、インタビューの中で用いられている尊敬表現を形式別に分類したものである。

尊敬表現の類型の中に「なさい、一てください」の例も含まれている。これらの表現は、宮地裕氏によれば、「……形式動詞」「一なさる」の命令形「一なさ

＜表2＞ 尊敬表現の類型

表 現 形 式	ゲストの使用回数	インタビュアーの使用回数
お（ご）～になる	3	41
ごらんになる		17
お～になられる		3
～（ら）れる	4	45
～て（ら）れる		7
～ていらっしゃる	13	78
～でいらっしゃる		15
～てくださる	25	7
お（ご）～です	4	13
お～くださる		2
お～い		3
お～ください		5
～てください		10
～なさい		1
なさる	4	55
いらっしゃる	15	33
おっしゃる	8	17
くださる	1	1
めす	1	
合 計	78	353

い」は尊敬表現に使えない。「（－して）くださる」の命令形「（－して）ください」も尊敬表現には使いにくく、「－（して）くださいませんか」などの形で使われるなど、表現的配慮が必要な場合がある』（注2）とされているが、ここでは、「－なさい」「－ください」は、命令表現における「尊敬表現」と見なし、「尊敬表現」の形式に入れることにした。

＜表2＞を見ると、ゲストがよく用いる形式は、「－てくださる」「－ていら

っしゃる」「いらっしゃる」であり、インタビュアーは、「お（ご）ーになる」「ー（ら）れる」「ーていらっしゃる」「なさる」「いらっしゃる」の形式をよく使用している。ゲストの尊敬表現は、話題になる第3者に多いことから、「ーてくださる」が25回出現したと見られる。「ーていらっしゃる、いらっしゃる」は、尊敬表現の形式として、ゲストの方にもインタビュアーの方にも頻繁に使われている。この形式は、尊敬表現として最も一般化されているように思われる。

一方、インタビュアーの尊敬表現の形式をみると、「ーなさる」「お（ご）ーになる」「ー（ら）れる」「ーていらっしゃる」「いらっしゃる」「おっしゃる」などが目立つ。ゲストの動作・行為を表すことばに敬語形式を施していることが分かる。これは、インタビュアーの立場からということももちろん作用するが、ゲストの使用している尊敬表現の形式の種類との格差という面からもおもしろい対照をみせているといえる。

また、ゲストの場合、同じ人物の同じ行為、動作を表現するのでも尊敬表現をとる場合と、とらない場合——ここではハダカ形とする——がある。ハダカ形の使用状況との対比の上で尊敬表現の使われ方を見ることにする。〈表3〉

インタビューの例として次のようなやりとりがある。

〔例1 ケース2〕

I：じゃ、その道を目指していただいたら、ひょっとしたら、同僚になってい
いたかもしれない。なんか大学で……。

G：あ、よくご存じですね。

〔例2 ケース22〕

I：お受けになった、こう、感想はいかがですか。

G：はあ、うれしいんでしょうか。

〔例3 ケース15〕

I：あの、で、写真をいろいろとね、お撮りになって、その中で私とても印象的なのは、あの、ソビエト軍の女性なんですか。笑ってるこう、笑顔の女性がありますね。

G：あの、彼女は27歳、25歳だったかな。

(——尊敬表現——謙譲表現——丁寧表現——非丁寧表現)

〈表3〉 ゲストのインタビュアーと第三者（話題の人物）に対する表現

ケース	尊 敬 表 現		ハ	ダ	カ
	0	現			
1	0		4	(母、コーチ)	
2	1	(インタビュアー)	2	(仲間)	
3	6	(インタビュアー(1)、仕事関係、ファン)	1	(親)	
4	1	(同じ出演者)	2	(同じ出演者)	
5	0		22	(親、兄弟)	
6	2	(インタビュアー(1)、女の方(1))	0		
7	3	(師匠(1)、～さん)	7	(師匠、祖母)	
8	4	(インタビュアー(1)、現地の方)	5	(現地の方)	
9	0		1	(夫の親)	
10	0		1	(知り合い)	
11	1	(インタビュアー+視聴者)	2	(友人、母)	
12	0		0		
13	0		0		
14	1	(視聴者)	2	(夫、子供)	
15	0		5	(アフガニスタンの難民・兵士)	
16	2		2	(母)	
17	14		9	(田舎の小学生)	
18	9		0		
19	2	(インタビュアー、一般の人)	4	(父、息子)	
20	12	(老人、看護婦、老人の家族)	13	(老人たち)	
21	14	(話題に出てくる～さん…)	0		
22	6	(同職種の人、仕事をくれる人)	6	(監督、エジター、同僚)	

＜表3＞で示したように、ゲストのインタビュアー（聞き手）に対する尊敬表現は、ゲスト22人のすべての談話の中で、6例に過ぎない。6例の中、4例は、直接インタビュアーに対する表現で、2例は、視聴者を含めた表現である。それらは「ご存じですね（2）」「ご免なさい」「呼んでください」「ご覧になってわかるように（視聴者と共に）」「思ってくださいの方が」というもので、ほとんどが尊敬表現を施そうとした意図が伝わってこない決まり文句的・儀礼的な表現である。インタビュアーが、ゲストに対し、尊敬表現を頻繁に使っていること＜表4＞を考慮に入れると対照的な応対ぶりとも見られるし、「おっしゃる」「いらっしゃる」「おーになる」など尊敬の度合いが高い表現も第三者に対しては使われていたが、聞き手である相手には使っていない点も注目される。

つぎに、第三者に対する尊敬表現の用い方であるが、尊敬表現は、「先生、自分のファン、お客さん、視聴者」などに、また、「仕事の上で世話になっている人、先輩に当たる人」に対し尊敬表現を使っている。しかし、同じ人物に対し、尊敬表現を使ったり、使わなかったりの例もある。そして、仕事の関係で登場する人にこのような例が多いが、ケース15のようにいっさい尊敬表現を使わないケースもある。話題の登場人物を個人として意識する場合は、尊敬表現を使用し、素材化した場合はハダカの表現、自分との関係が親しい場合はハダカの表現を用いるということであろう。

次にインタビュアーの尊敬表現の様相を見てみる。＜表4＞

インタビュアーの相手（ゲスト）に対する配慮は、尊敬表現、謙譲表現がよく調和された形で現れる。尊敬表現の数が少ないかと思うと、その分謙譲表現で補うという具合である。しかし、ゲストによってそのゲストとの親疎のかかわりで、ことばづかいに影響が出てくるケースもある。＜表4＞で尊敬表現はゲスト、ゲストの身内に表われる場合が多いのが分かる。話題によって、第三者に施されるケースもある（ケース21）。

ゲストの年齢と関連があるかどうかを、敬語表現の頻度に変化があるかを＜表4＞の年齢順に並べたケース1～22にわたってみてみたが、年齢はそれほど影響を及ぼしていない。

親疎については、ケース4の場合を見ると、ゲストに対して5回しか尊敬表現

＜表4＞ インタビュアーの尊敬表現

尊敬される人	ゲスト	ゲストの身内	第三者	視聴者	そ の 他
ケース 1	15	3	1	1	
2	10				
3	15	4	2		1 (ゲストを含む5人)
4	5		3	1	
5	5	10	2		
6	11		2		
7	14		3		
8	7		6		
9	13		3		
10	15		1	4	
11	9	2		1	
12	21		2		
13	16	4			
14	9	2			
15	10		1		
16	7	5			1 (ゲストを含む他の人)
17	8		1	1	
18	9	1	3		
19	9	2	2	1	
20	12	1	5		
21	14		13	1	
22	18	3	2		

を使っていないし、謙譲表現も14回出るが、その内容は、「お越し頂く」が5回、「お願いします」が2回、視聴者に向かった表現（お伝えしてまいります、ご覧いただけますなど）が4回で、あいさつ語的なものばかりでゲストへの敬意を特に示す表現ではない。ケース4の場合は、インタビュアーのゲストに抱く親密度（インタビューのやりとりの中で以前からの知り合いであることが示されている）と、ゲストがインタビュアーより若いことが作用し、それほど尊敬表現が出てこなかったものとみられる。

また、視聴者に対しては、尊敬表現は10回しか出てこないことも注目される。視聴者は、インタビュアーの方に近いという認識からこのような結果が出たのであろう。

2. 謙 譲 表 現

〈表5〉は、〈表1〉で示されている謙譲表現の数値を表現形式別に分類したものである。

ゲストの場合、談話数1,078（いくつかの文レベルを含む）の中、出現した謙譲表現は、22人分合わせて62回である。その中で、決まり文句的な表現「お願いします（いたします）」の12例をひくと、50例にすぎない。形式としては、「ーていただく」「（さ）せていただく」「いただく」と「おーする（いたす）」が多い。この両形式は謙譲表現の代表格といえるだろう。謙譲表現と尊敬表現と年齢を関連させ、〈表1〉を見ると、ケース17・18・20・21の場合比較的使用している。50代以後の年齢層である。ケース22のゲストは、尊敬・謙譲の表現の数は、少ないが、丁寧表現が最も多く、丁寧さの面ではバランスが取れている。また、このゲストの職業（フィルム編集）とも大いにことばづかいは関連があると推測できる。50年にわたり、男性と対等に働く女性として、対等な関係での対話が多かっただろうとも推察できる。また、インタビュアーがゲストの自分より年下ということも影響し、尊敬・謙譲の両表現が少なかったと思われる。これと対照的に、ケース3の場合は、尊敬表現が6回、謙譲表現が8回使われている。このケースの場合、丁寧表現118回、非丁寧表現23回である。尊敬・謙譲表現の数と、全体的バランスは別の問題であることが指摘できる。

＜表5＞ 謙譲表現の類型

表 現 形 式	ゲストの使用回数	インタビュアーの使用回数
お（ご）～いただく		23
おこしいたく		33
～ていただく	15	20
～ていただける		2
～（さ）せていただく	8	8
お～する（いたす）	11	16
おねがいする（いたす）	12	29
うかがう	1	29
拝見する	2	11
拝聴する		1
申す	6	2
いただく	4	1
いたす	1	1
まいる		2
～てまいる	1	4
お目にかかる	1	
合 計	62	182

次に、インタビュアーの謙譲表現を見る。

インタビュアーの謙譲表現は尊敬表現の出現数に比べ、約半分である。おもに使われている形式を見ると、「お（ご）～いただく」23回、「お越しいたく」が33回、相手を「お、ご」をつけ、いったん、敬ってから「いただく」をつける形式である。インタビュアーという立場ならではの謙譲表現であろう。「お願いします（いたします）」はゲストと互いにかわすあいさつ語で29回出る。「お～する（いたす）」は、16回で、話を引き出していくインタビュアーの立場上、それほど多くはないだろうと推測できる。「うかがう」が29回出てくると表裏をなすと考えられる。また、「～ていただく」「～（さ）せていただく」「い

ただく」は、31回でゲストとそれほど隔たりはない。

以上のように、インタビューの謙譲表現は、ゲストのそれと、質的に差があるということが分かる。ゲストを迎え、丁重なことばづかいで相手から話を引き出し、インタビューを続けていく立場であることが、このような形式の様相にもよく現れているといえるだろう。

3. 丁寧表現と非丁寧表現

丁寧表現の代表的なものは、「一です」、「一ます」である。これは、聞き手に対する配慮からくる表現形式であるとされている。インタビューに答える女性たちとしては、尊敬表現の場合と同じく、ここでは、非丁寧表現との差で考えていきたい。非丁寧表現とは、言い切りの表現（「ちがう」「なつかしい」など）、省略表現（「…という」「…とか」）、「はい」に対し「ええ、え」、「いいえ」に対し「いや」などの表現である。言い切りの表現は、自分に限定する表現（あゝなつかしい）も含めているが、アナウンサーに対するケースもある。どちらの場合も聞き手に対する丁寧さの配慮がなされていない点では共通している。省略表現は、丁寧表現の省略の場合もありうるが、やはり形を整えていない点で「非丁寧表現」に入れることにした。このような前提から、実際のインタビューの場合はどのような様相を帯びているのかを見てみた。

「です・ます」は話し手がつけようとするれば、いくらでもつけられる。「ですから」「一でして」「しましたら」「しましたとき」「ありまして」「それでですね」「おもいます」「かんがえてますけれども」「そうですね」などである。どこにでもつけられるこの「です・ます」は実際の対話の場面ではどのように運用されているのか。

〈表1〉では、談話の総数を示しているが、一つの談話と数えられたものにはいくつかの文が含まれているのが普通である。

10のケースを取り上げ、「です・ます」の使われ方を見てみた。

丁寧表現と非丁寧表現の比率と言うのは、年齢とはそれほど関連していないようである。ケース1とケース2は二人とも20代であるが、一人は、おもに、丁寧な表現を使っているのに、もう一人は、言い切りや文末の表現が途中で終わっ

てしまうが多い。ケース

＜表6＞

9とケース14は30代で、対照的である。30代前半のケース9は、1回しか非丁寧表現が使用していないが、30代後半のケース14には12回出てくる。丁寧表現との比率からみても、30代後半の方が、非丁寧度は高い。ケース17とケース22もケース9、14の場合と同じ傾向にある。ケース21の79歳のゲストの場合

	丁寧表現	非丁寧表現
ケース 1(20代前半)	110	19
ケース 2(20代後半)	92	3
ケース 9(30代前半)	135	1
ケース 14(30代後半)	82	12
ケース 16(40代後半)	54	9
ケース 17(50代前半)	110	8
ケース 19(50代後半)	94	25
ケース 20(60代前半)	108	9
ケース 21(70代後半)	92	4
ケース 22(70代後半)	146	6

とケース9は比較的丁寧度が高い。

このように見てくると、年齢と丁寧度は、それほど関連していないことがわかる。すなわち、丁寧にいかいわないかの個人のスタイルの問題で、年齢にかかわらずがないことを示しているのである。

しかし、ケース1の場合は、言い切りや省略の表現が多い反面、「いきましたんで」「一ですとか」「しましたんで」「ありますし」など、「ます・です」を省略してもかまわない場合に丁寧表現を使っている。この人は、たとえば「そうですね」「そうなんです」を40回も使っている。尊敬表現が出現しなかった点も合わせて考えるとバランスのとれない話し方という印象を受ける。

ケース21の場合は、上記の表でも見られるように非丁寧表現は4回しかない。丁寧表現の例を見ると、文末の「です・ます」以外に「なくなりまして」「あったものですから」「できませんとね」「なりますし」「おもってますので」「いますかね」など、「です・ます」を使用しなくてもいい場合の使用が、34回もなされている。また、「ございます」「きいております」などの表現も出ており、全体的に丁寧な雰囲気崩さないで一貫するという特色がみられる。

談話全体のバランスという面から、＜表1＞のケース10（30代後半）の数値

を見ると、談話総数 34、尊敬表現 0、謙譲表現 1 回、丁寧表現 65 回、非丁寧表現 4 回である。このゲストは、尊敬・謙譲表現が少ない。また、談話総数も少ない。非丁寧表現の数も少ない。談話総数が少ないことは、一まとまりによく要約し話しているということである。そして、丁寧表現をもって敬語表現を代表して使用しており、文のつながる部分では「です・ます」を用いず、いったん文末と見なされる部分で「です・ます」をつけ、文を締めくくっている。冗漫に流れず要点を明確におさえるという非常に好感がもてるインタビューのスタイルであった。丁寧度と関連し、話の全体のスタイルの面で考察を続けたい問題である。

4. 敬語における男女の差

日本語には女性語が存在していて、特に、それは敬語と密接な関連があるとされる。しかし、今までの 22 人のインタビューの分析の結果をみると男女差（敬語の使用の面で）というのはほとんど感じられない。

インタビューの中でインタビュアーの男性が、尊敬表現、謙譲表現を頻繁に使用していることが分かる。これに対し、ゲストの方が敏感に反応していないことはおもしろい事実といえよう。一般的に女性の方が敬語表現を好むような印象を与えるのは「お・ご・さん」などの美化語の使用の実態からではないかと思われる。また、前掲の渡辺氏の「敬語・差別語」に、

接頭辞の「お」や、丁寧語の「ます」のようなものを敬語と考える人が二十年間に減ってきたことがはっきりした。この点で一般人の敬語意識は変わってきた、といえるであろう。（国立国語研究所報告 77 『敬語と敬語意識——岡崎における 20 年前との比較』 三省堂 一九八三年 二四六ページ）という指摘がある。この指摘どおり、美化語とは敬意はそれほどなく、その名前どおり、ことばの化粧といったところではないかという感じがする。美しい日本語の主役は丁寧語・美化語の方に傾きつつあるのではないだろうか。

— ま と め —

現代の日本の女性の敬語の実態を知る試みとして、上記のように分析をおこなってみた。女性は敬語表現を好むというのが、一般論である。しかし、今回のイ

インタビューの分析結果を見ると、全体的に尊敬表現と謙譲表現のいわゆる敬語表現が少なく、「です・ます」の丁寧表現が主流である。これも渡辺氏は、丁寧と言わず、普通体と言っておられる（注3）。

まず、尊敬表現であるが、インタビューの性格上、第三者（身内以外の人）が話題になることが少ない事実から、第三者に対する尊敬表現はそれほど期待できないのは当然であるが、聞き手のインタビュアーに対する尊敬表現が、6例にすぎなかったという事実は注目しなければならない点であろう。

第2に、話題がゲスト自身に関するものが多いのに、謙譲表現が少ない。このインタビューのゲストたちは社会的に活躍している人々である。会社などで同僚との間では女性・男性の敬語の差はそれほど認められていないという報告がある（注4）。この事実に関連して、仕事に関係した話になると、敬語の比率が少なくなることも考えられるし、社会の変化にともない、自分を下げ、相手を敬うと言う意識は徐々に薄れているのかもしれない。謙譲度の度合とは別に、筆者本人を含め、留学生たちが「一からまいりました」「おめにかかれて」「はいけんさせていただきます」「ぞんじます」などの表現を、日本へ来て間もないうちは頻繁に用いていたのが（教科書で習ったとおりに忠実に表現して）、日本に滞在する時間が長くなるにつれて、「です・ます」に変わっていく現象と密接な関係があるのだろう。このような現象をどのように把握し、対処していくかは筆者の今後の課題でもある。

美化語と丁寧語については、もう敬語という意識が薄れているという報告もある。今回の資料に登場してきた女性たちは、インタビュアーと同等な立場から話を交わすのに尊敬語や謙譲語は要らないとの判断からか、それらの表現はあまり使っていない。その一方で「です」「ます」を多用しているのは、自分の言葉づかいがぞんざいにならず、相手に失礼にならないようにとの意識の現われと考えられる。

最後に、ゲストとインタビュアーの敬語表現の格差を見て、ゲストのことは今の自然な話のスタイルを、インタビュアーのことはづかいからは、職業的立場というのが、強く感じられたことを記しておく。

<注>

- (注1) 渡辺友左「敬語・差別語」『解釈と鑑賞』平成元年7月号
- (注2) 日本語教育事典(大修館) p.228 参照。
- (注3) (1)に同じ。
- (注4) 高崎みどり「模索期の女性語」『ことば』9号 p.31 参照。